

住民総参加の福祉のまちづくりへ向けて
地域グループの役割

住民活動の 仕掛け方

はじめに

今は文明の時代。物事は効率的にシステム化され、それに従って人間が動いていく。福祉の世界も同じで、ボランティア活動を推進する場合も、関係機関はボランティアを公募し、応募してきた人たちを組織化し、活動してもらいます。

ところが住民はそのとおりに動いていません。公募しても人はなかなか集まらず、いつも同じ顔触れで、その人たちの愚痴は「やらされ感がある」ということです。

活動を仕掛けるには、人間の思考・行動様式や、その国の精神文化を踏まえた仕掛け方を工夫しなければならないのです。

たとえば、住民を集めて集会を開きたければ、行政が呼びかける形にすれば集まるとか、会社ぐるみの活動なら参加するといったことがあります。欧米と違い、「出る杭は打たれる」と言われる日本では、人々は自発的に活動するのは苦手で、「柔らかな強制」ぐらいが動きやすいという要素があるのです。実際に、わが国の仕掛け方の多くには、じつはこの手法が使われています。

本書ではまた、住民総参加を実現するために、活動者を縛る「ボランティア」の要件を引っくり返し、多様な「活動」のあり方を認めていくことを提案しています。

住民活動を仕掛ける立場にいる方は、まず本書をお読みいただければと思います。

<目次>

- <第1章>活動者を縛る「ボランティア」／2
- <第2章>推進者が改めるべき－10の主義／8
- <第3章>活動の仕掛けづくり－4つの課題／12
- <第4章>日本の風土を生かした仕掛け方／17
- <第5章>担い手にも、受け手にも「寄り添う」方法／18

<第1章>

活動者を縛る「ボランティア」

社会活動に踏み込もうという時、「ボランティア」という言葉が私たちをある方向へ導こうとします。気軽に始めようとしても、「ボランティアというものは、かくあるべき」と誰かが言い出すのです。この縛りから解放するのが、一億総参加を実現するための前提条件になります。

(1) 「ハレボラ」と「ケボラ」がある

国民のボランティアに関する意識調査が時々国の機関などで実施されますが、その結果は大体どこも同じです。「ボランティアをしている」という人は僅かで、せいぜい十数パーセント。残りの60～70パーセントが「機会があればする」「条件を整えばする」と答えるのです。

そう答える国民の意識の中には、「ボランティアはかくあるべし」というものがあるのではないか。そういう厳しい定義づけでは「自分はボランティアをしていない」となる人も、もしこの定義を緩めれば、実は何らかの活動をしているのかもしれない。

「ハレ」と「ケ」という言い方があります。非日常的な営みを「ハレ」と言い、その反対の日常的な営みを「ケ」と言います。言うなれば、いわゆる「ボランティア」というのは「ハレボラ」のことで、残りの大部分の人、つまり「私はやっていない」という人たちは、「ケボラ」をしているのかもしれないのです。

(2) 「ボランティア」の定義を全部ひっくり返したら？

そこで、「ボランティア」という言葉で言われている「定義」なるものを全部並べてみて、それをひっくり返してみたらどうでしょうか。この中には、元々の定義にはなかったが、いつの間にか「定義」に加わってしまったものもあります。矢印の後が、その定

義を引っくり返してみたものです

①余暇活動

→ボランティアは余暇活動に限らず、本業の中でもできるし、日本人は本業の中で、そうと意識しない中でボランティアをしている。

[事例] 観光地の駅前のケーキ屋さんで買い物をしておつりを待っていたら、「お買いにならなくてもご遠慮なく両替えをお申し付け下さい」の張り紙が。また、ショウウィンドウの上には、よく尋ねられる観光名所を記した手書きの地図のコピーが積んであった。

このように、駅前店だから頼まれやすいことに対し、普通なら「両替お断り」などの張り紙をするところだが、この店長は積極的に要望に答えていた。他にも「荷物を預かってあげます」「傘を貸してあげます」も。本業に勤しみながらできることはあるものだ。

②個人的に

→ボランティアは個人的にやるものと思われているが、会社ぐるみで取り組むことが多い。会社と社員が相乗りだ。

[事例] カラーコピー機のメーカーに勤めるS男さんは、妻が視覚障害児のための拡大教科書を作るボランティアをしていて、イラストや写真の部分が大変だと嘆いていた。そこで、自社のカラー複写機ならきれいにできると言ったら、「それを使わせて!」。どうせなら全国の同種のボランティアにも使わせてあげられたらと思い、本社の社会貢献部局に相談したところ、会社の社会貢献活動に組み込まれることになった。

③自発的に

→活動は自発的にするものだという人が多い。しかし、初めは促されてやっていたのが、いつしか本気で取り組むようになったといった事例もある。自発性というのは、活動の条件ではなく、活動の成果でもいいのだ。

[事例] 大学で授業をした時、生徒たちに「ボランティア」を勧めたら、「授業中になら

する」「単位をくれたらする」「女の子とデートできるならする」「お金をくれたらする」などと言う。では試しに授業中にしようと言ったら、反応した。1時間、キャンパス内のゴミを拾い、残りの30分で感想文を書かせた。すると「僕は生まれて初めて、道に落ちているゴミを拾った。こんなにすがすがしい気持ちになったのは初めてだ」などと感動していた。

それから数週間後、事務局の人からこんなことを言われた。「このごろ学生たちが登下校の途中にゴミを拾っているけど、木原先生の影響じゃないでしょうか」。たしかに自発性は活動後に芽生えた。

④特技を生かす

→「私にはこれといった特技がないので、活動はできない」という人が多いが、生かし方によっては、何でも特技になり得る。寝たきりの人が、学生の介護学習のモデルを買って出て、ボランティアをしていた。

〔事例〕都内のボランティアセンターで事務のボランティアをしているK男さん。女性ボランティアが、訪問先のシニア男性が彼女の働きかけに全く反応しないので困っていると聞き、「では私が」と代わりに訪問してみた。やはり反応はない。

「奥さん、ご主人は以前に何かしていませんでしたか？」と尋ねたら、囲碁ならやっていたという。ならば囲碁をやるかと聞いたら、やると答えた。

ところがK男さんが軽く負けてしまった。再度挑戦したが、また負けた。三度目も負けで、さすがにK男さんも悔しさいっぱい。ところがその瞬間、相手の男性が初めてしゃべった。「やったあ！」。K男さんが負けるたびに、男性は言葉が増えていく。K男さんは、その後も通い続けた。何とか一矢を報いたい一念でだ。

私は「囲碁負けボラ」と命名してあげた。囲碁が弱いのが特技になったのだ。

⑤組織的に

→本格的にボランティアとして取り組むべき、という意味も含まれていて、日常の中で

のちょっとした活動はボランティアとは認められない。しかし、反対に「ちょいボラ」というのもあっていい。

〔事例〕 毎月都内の老人ホームにボランティアに行っているというK氏が、奇妙なことを言い出した。「僕にはね、恋人がいるんだよ。それも百歳の」。恋敵も何人かいるという。一体どういう女性なのか。

女性はその老人ホームの入所者で、とにかく笑顔が素敵なのだという。彼女の笑顔が見たくて通っているボランティアが数名いるらしい。

ただの「笑顔」と思われるかもしれないが、その笑顔に癒されて通って来る人たちにとっては、これも立派な活動ではないか。

⑥ 純粹な動機

→これもよく言われることだが、動機が不純だとボランティアとは認められないという人が少なくない。では、不純な動機からは不純な活動が生まれてくるのか。そうではなく、不純な動機から良い活動が生まれ得るのが、人間のすばらしさなのだ。

〔事例〕 大分県で開かれたボランティア・シンポジウムで、阪神淡路大震災の現地へボランティアに通ったという青年が登場した。「うちの息子に、君の爪の垢でも煎じて飲ませたい」とパネラーの1人が青年を褒め称えた。

すると「そうじゃないんですよ」と青年が言った。じつは彼は震災の時、不登校で苦しんでいた。どこかへ行ってしまいたい。できれば、遠い所へ。彼が被災地に行ったのは、逃避のためであった。動機は不純だが、それが彼の活動の価値を下げるものではないことは明らかだ。

⑦ 社会のため

→では自分のためでは駄目なのか。身内のためでも駄目なのか。今は自分の問題に取り組み、それを仲間との助け合いに発展させている活動が爆発的に広がっている。セルフヘルプグループだ。また、身内のための活動も、結果的には社会のためになる。

〔事例〕 夫の地域デビューに取り組んでいる主婦がいる。退職したとたん、「さあ、町内会長を引き受けなさい」。近くにプールができたなら、「私も一緒に行くから」と水泳のグループに入れさせた。同じやり方で、カラオケグループやゴスペルの会などにも。

妻が要介護になり、夫が介護をするようになると、夫が周囲の関わりを拒み、引きこもってしまうことが多い。妻の友だちが来ても会えないなど、妻も孤立してしまう。そういう中から介護殺人が生まれる。

だから夫婦ともに元気なうちに夫の地域デビューを実現して、夫婦共通の知り合いをつくっておくことが重要であり、自分たちの老後のために妻が夫の地域デビューに取り組むことは、社会のためにもなる活動なのだ。

⑧ やりたいことを

→では「やってほしい」と言われたことではいけないのか。しかし相手から見込まれたことをするのなら、必ず相手の役に立つ、という意味では、正しい。

〔事例〕 A子さん夫婦は共稼ぎで、宅急便が来ると、2人とも家にいないので困っていた。そこでAさんが思い出したのが、駅への道沿いに住んでいる高齢者夫婦。2人ともいつも在宅の様子で、玄関も広そうである。ダメもとでお願いしてみたら、いいですよと承知してくれた。

これで助かったAさんは、このことを近くの共稼ぎ夫婦に伝えた。その後、10軒ほどの夫婦がこの老々世帯に宅急便の預かりをお願いしているという。

頼まれた方はそんなことを思いつきもしなかったが、困り事を抱えた方の人たちが、老夫婦の特技に気が付いたのだ。玄関は広いし、2人ともいつも在宅ということが、宅急便を預かるのにぴったりの条件だった。

⑨ 汗を流す

→「体を使って」という意味もある。ただ考えたり、言ったりするだけでは活動とは認めがたいというわけだ。

〔事例〕福祉セミナーに高齢の女性が来ていた。何か福祉の職場で働いているのかと聞いてみたら、幼稚園の教諭をしているという。「失礼ですが、そのお年で務まっていますか」と聞いてみたら、一緒に遊ぶことはできないが、何とか務まっていますと言う。

どういうことか。子どもたちは皆、彼女にこう言うのだという。「先生はそこに座って、僕たちが遊ぶのを見ててね」。どうやら、自分の目から子どもたちに向かって何かが出ているらしいのだと女性は言っていた。

樹木からはフィトンチッドという物質が出ていて、それを浴びることを森林浴という。同じように、子どもたちは老人浴をしているのかもしれない。高齢者は居るだけで役に立っている。「居るボラ」と名づけた。

⑩無償で

→これは「ボランティア」の基本的な要件と考えられてきたが、活動の中身によっては、無償では済まない場合もある。問題はお金をいただくかどうかではなく、その活動にどれほどのボランティア精神をつぎ込むかということではないか。

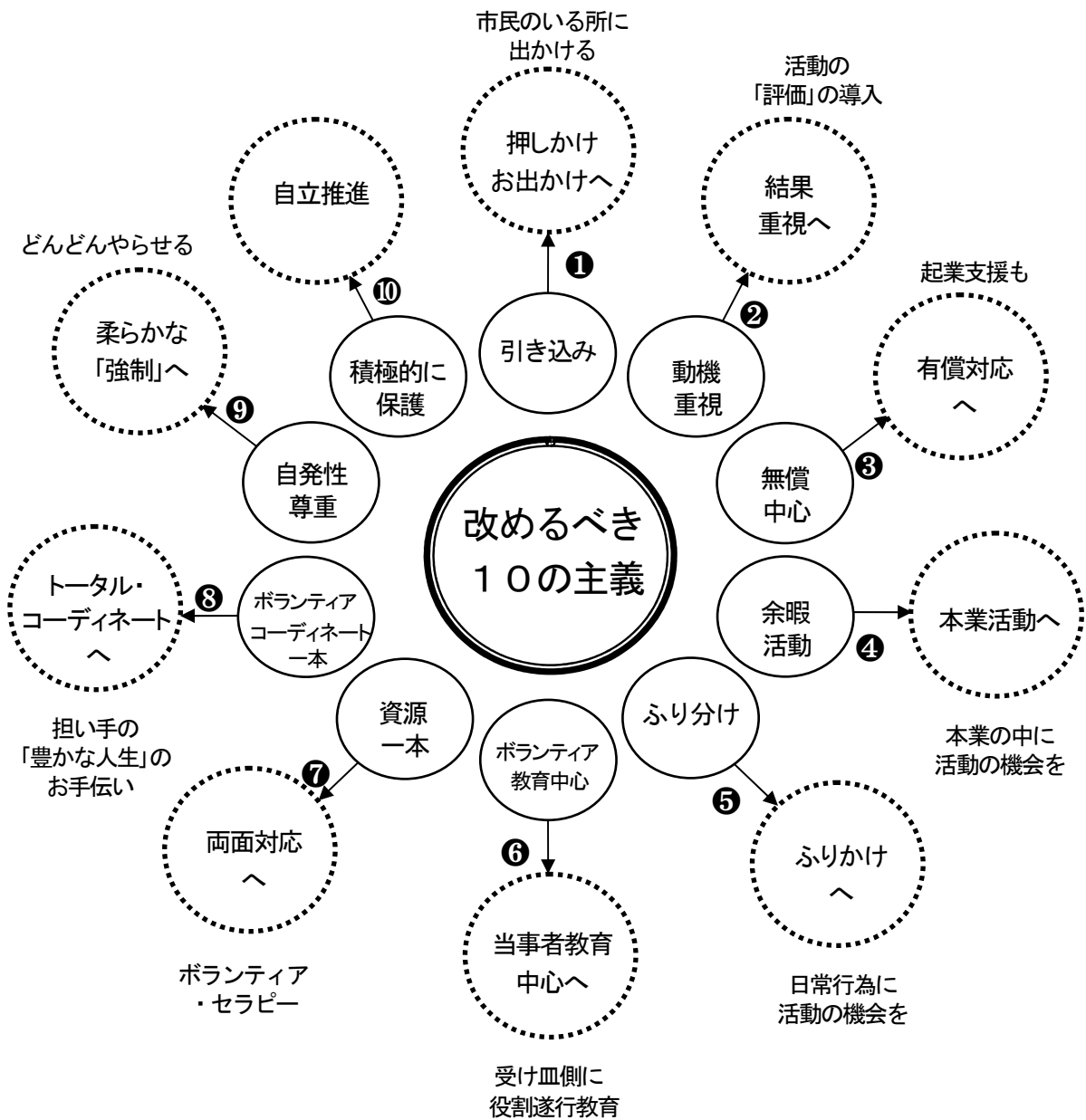
〔事例〕最近では、企業が業務の中で社会貢献をすることが広く行われるようになっている。たとえばタクシー会社が、運賃だけで薬の受け取りや買い物などの用事を引き受けてくれるというサービスがある。有料ではあるが、普通なら本人が行ってやらねばならない買い物などを、その部分はお金をとらずに運転手が代行してくれるのだから、ボランティア色の濃いサービスであるし、無料でなくても要援護者は助かる。

すでに社会は、こうしたサービスの社会的な役割を高く評価している。「有償ボランティア」という言葉に、いまだ違和感を抱く人が少なくないが、「ボランティア」という言葉は最近では「活動」という言葉とほぼ同義になっており、「有償ボランティア」とは「有償の活動」という意味でしかないのだ。

<第2章>

推進者が改めるべき—10の主義

住民総参加を実現するには推進の方法をどのように改めたらいいかを整理してみた。
小さな丸が現状。それをこう改めたらというのが大き目の丸だ。



① 「引き込み」から「押しかけ」へ

推進者は活動志願者を自分の拠点（ボランティア・センターなど）に引き寄せようとしがちです。しかし、わざわざそういう所まで来て活動をしようとする人は極端に限られます。ボランティアの裾野が広がらないのもそのためです。

市民に広くボランティア活動を勧めるには、推進者の側が「センター」を出て、市民のいる所まで出かけて行かねばなりません。普段の生活の中で、たまたま接したニーズ（活動テーマ）に関わるというのが、最も効率的な住民パワーの発揮の仕方なのです。

② 「動機」から「結果」へ

「動機」にこだわることをやめ、その「成果」に着目することです。そのためには、活動に対する評価を導入していく必要があります。アメリカでは、活動志願者に到達目標を立ててもらい、それが達成できなければ活動をやめさせるケースもあるほどです。

③ 「無償」から「有償対応」へ

無償にこだわらず、有償にも対応します。何でも有償にするわけではなく、活動をレベルアップさせようとした時に「無償」が障害になった場合、有償も選択肢にするということです。

④ 「余暇」から「本業」へ

人間は本業の場で本業の腕を生かそうとしたとき、最も強力な力が出るものです。特に日本人は「余暇活動」でボランティアをやるほどの気はあまりなくても、その分、本業の場で相当のボランティア精神を発揮しています。企業なら本業の中で、趣味活動をしているのならその活動の中で、住民グループに所属しているのなら、その活動の中で。

⑤ 「ふり分け」から「ふりかけ」へ

今まで推進者は「ボランティア」を他の営みと分けようと考えていましたが、む

しろ市民の普段の営みに活動を「ふりかける」方が自然なあり方です。

得意な趣味がある人には、その趣味を生かせる活動を提示すれば応じやすいし、それによって、その人の力を最も有効に生かすことができるはずです。この方法なら、住民総ボランティアも実現可能なのです。

⑥ ボランティア教育から当事者教育へ

今まではボランティア活動に関わる教育といえば、専ら活動者側に対して行われるものだと考えられてきましたが、これからは当事者側、つまりボランティア活動の対象となる人たちへの教育をもっと重視する必要があります。

当事者とは、ただ受け身の姿勢でいればいいのではなく、「活動の主体者」としての自覚を持ってボランティアを上手に活用していくことが求められています。当事者がそれだけの主体性を持ってボランティアに相對すれば、ボランティアの様々な問題が消えていくのです。

⑦ 「資源一本」から「両面对応」へ

推進者はボランティアの活動者を資源としてしか見ていないところがありますが、ボランティアの活動者も、ある面では対象者でもあるのです。

「ボランティア活動をしたい」とボランティアセンターにやって来る人の少なからずが、自身もまた何らかの悩みを抱えている場合があります。人のために活動をすることで、自身の問題が解決される「ボランティア・セラピー」のことも知っておく必要があります。ボランティアセンターは、カウンセリングマインドを備えておく必要があるということです。

⑧ ボランティアコーディネートからトータルコーディネートへ

ボランティアセンターに来る人は、活動だけを求めて来るわけではありません。ボランティアもするけど、友達づくりもしたいし、趣味も楽しみたい。だから、これからのボ

ランティアコーディネーターは、活動だけのコーディネーターというよりも、活動も含めたトータルなコーディネートをすることが期待されます。市民の「ライフデザイン・コンサルティング」を含めて対応するのです。

⑨「自発性尊重」から「柔らかな強制」へ

自発性ばかりを求めると、「好きな時に好きなようにやればいい」といった考え方につながります。また、欧米と違い、「お節介」とか「出る杭は打たれる」と言われる日本では、人々は自発的にボランティア活動をするのは苦手で、むしろ「柔らかな強制」ぐらいが動きやすいという特徴があるのです。

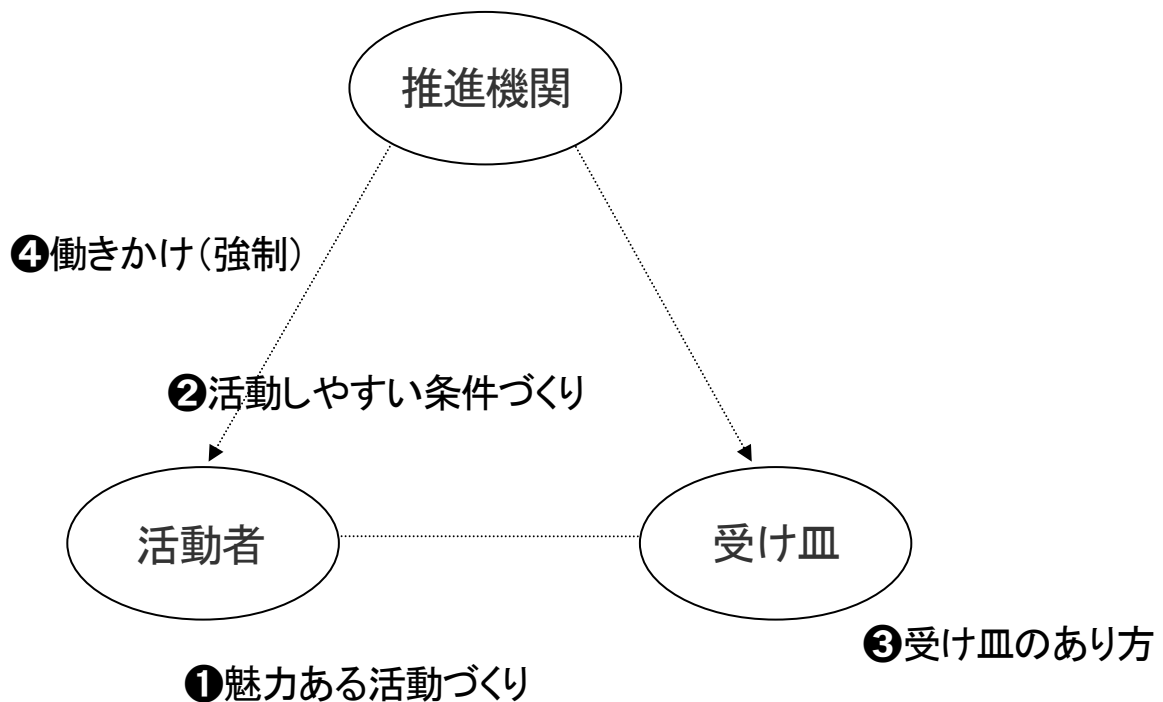
⑩「積極的に保護」から「自立推進」へ

推進者の活動者への対応を見ると、「お客様」という感じがあります。ボランティア活動をしてもらえるのだから、そこで起きる問題はなんでも解決してあげるのがこちらの役割と、なんでもお膳立てしてしまいます。しかしこれでは、ボランティアのためになっていません。基本的には、自分たちでそれらの問題に対処していくのが本道であり、ボランティアグループに対しては、もっと自立志向の対応が必要です。

<第3章>

活動の仕掛けづくりー4つの課題

具体的に活動を仕掛けていく場合に、常に次のような構図を頭に入れておくといいでしょう。活動推進・仕掛けの課題は、すべてこの4つのいずれかだと思っています。



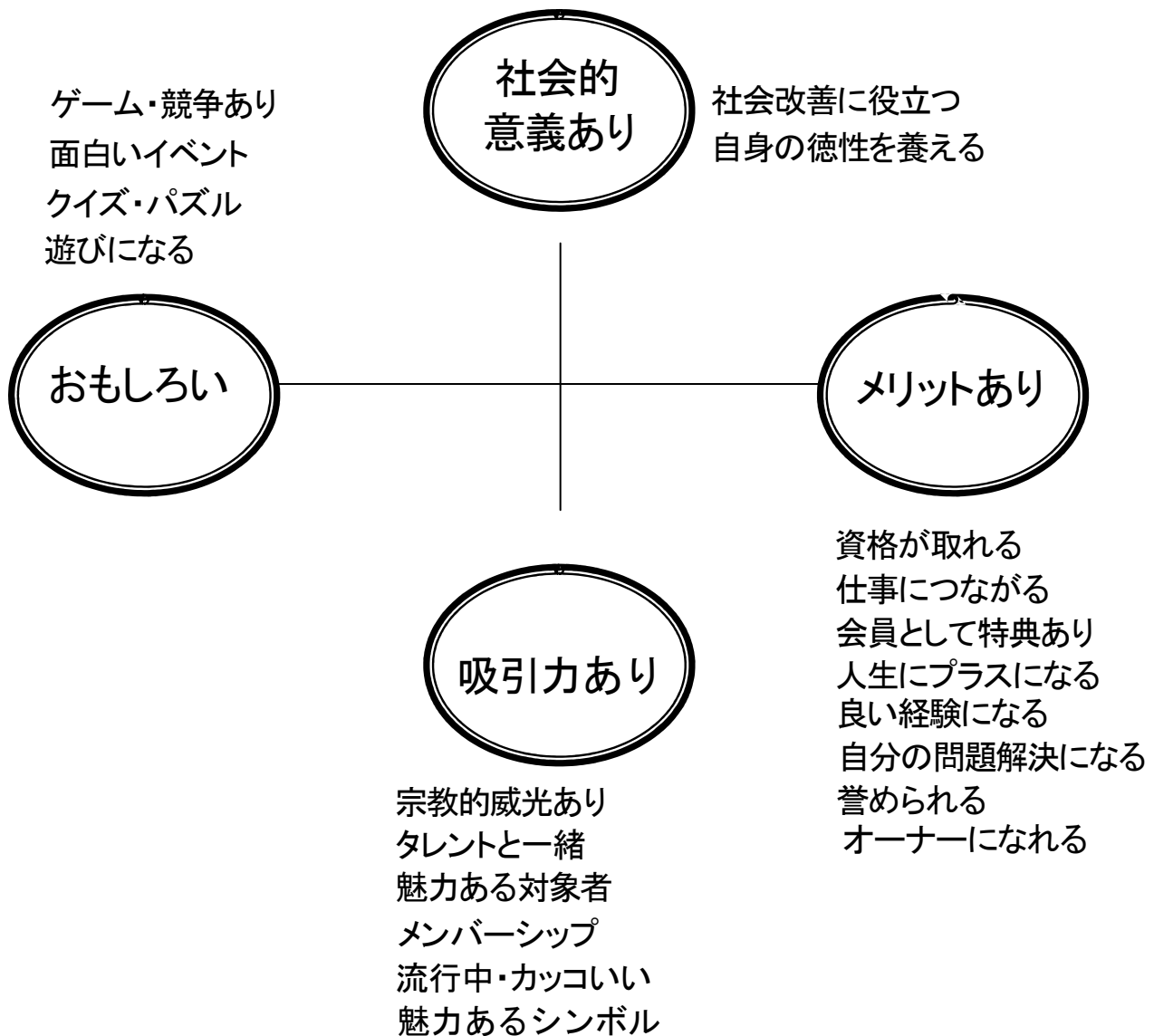
福祉の世界で意外に考慮されていないのが、一つは受け手側のあり方です。前述の通り、福祉活動の主体は担い手ではなく、当事者としての受け手であるべきで、ただ受け身でいればいいのではなく、積極的に果たすべき役割があるという点があまり認識されていません。

もう一つは、活動の働きかけ方です。これも前述しましたが、日本人はいわゆる「ボランティア」の精神に含まれている自発的な活動というのが苦手で、みんながやるからやるとか、会社の意向でやるというように、柔らかく強制される形が好ましいのです。

①「魅力ある活動」の4つの要件

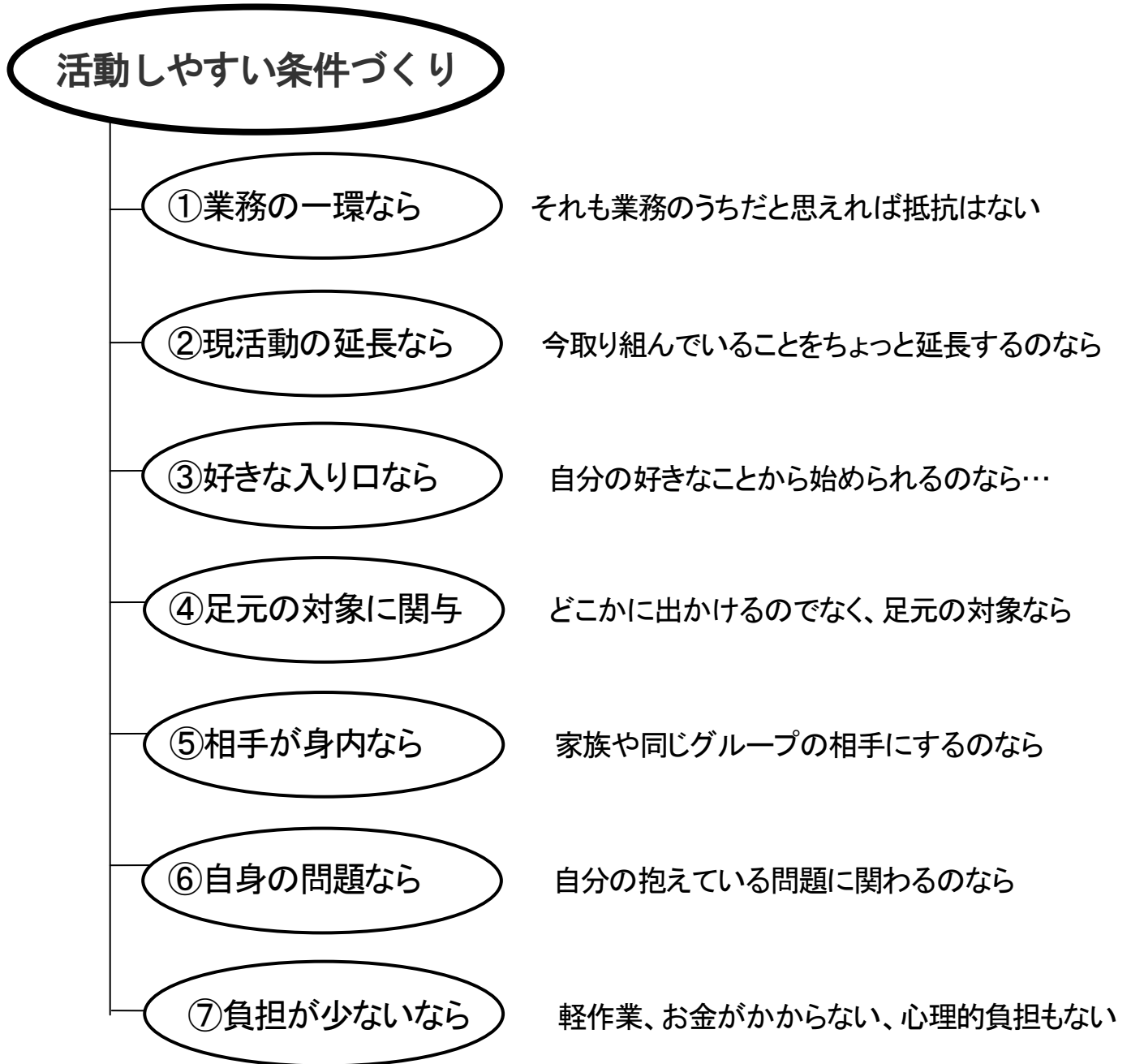
活動そのものを魅力あるものにしないと、住民は飛びついてきません。多くの場合、「社会的な意義」は問題ないので、あとの「おもしろさ」と「メリットあり」に難点があるのです。

真面目なボランティア活動におもしろさやメリットなど見つからないと思われるかもしれませんが、それでも何とかおもしろくできないものか、メリットを与えられないものかと工夫することが推進者の役割なのです。アメリカのボランティア募集の広告を見ると、「この活動に参加すればこんないいことがありますよ」とアピールポイントが書き添えられているのを見かけます。



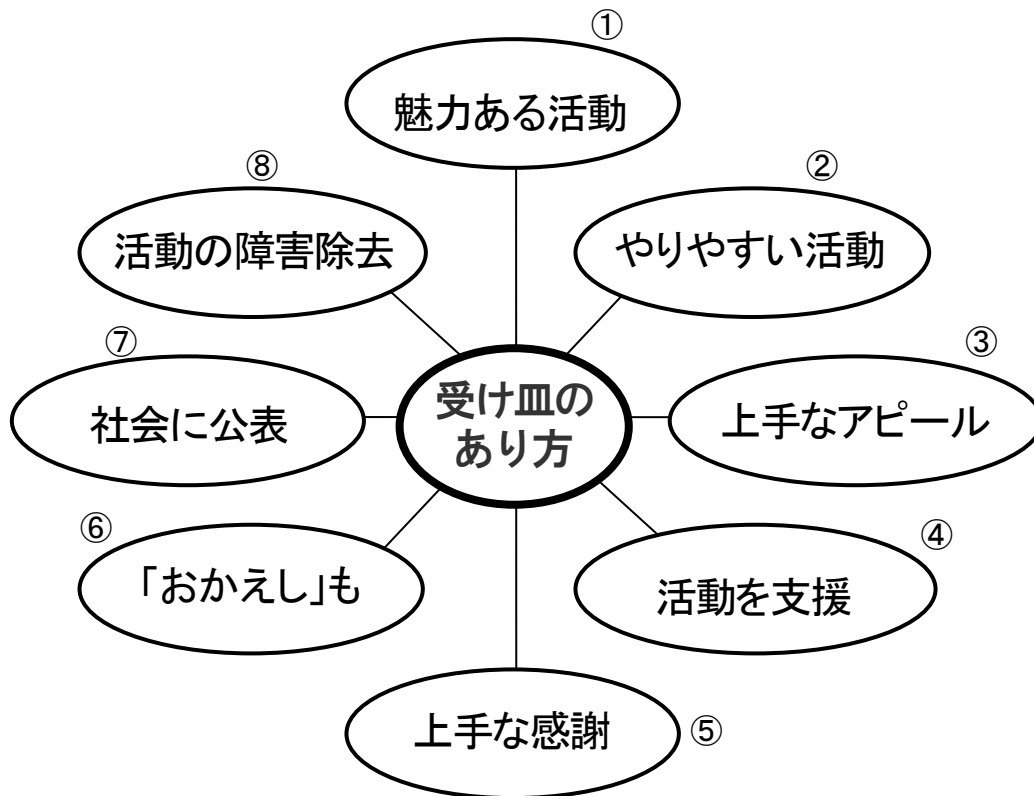
②活動しやすい条件づくり

活動しやすいとは、無理なく活動に踏み切れるということで、いま自分が取り組んでいることの延長でやるのなら、スムーズに入れます。それは本業かもしれないし、趣味活動や婦人会などのサークル活動かもしれません。としたら住民が今やっていることに取りついて、その中に活動をインプットするのがベストということになります。



③受け皿(活動の対象者)側のあり方

住民が活動したくなるかどうかは、活動対象または受け皿のあり方も関わってきます。推進者はただ住民に活動を促すだけでなく、ボランティアを求めている団体などの側にも、住民が活動したくなるような要因を意図的につくっていくよう指導していきます。

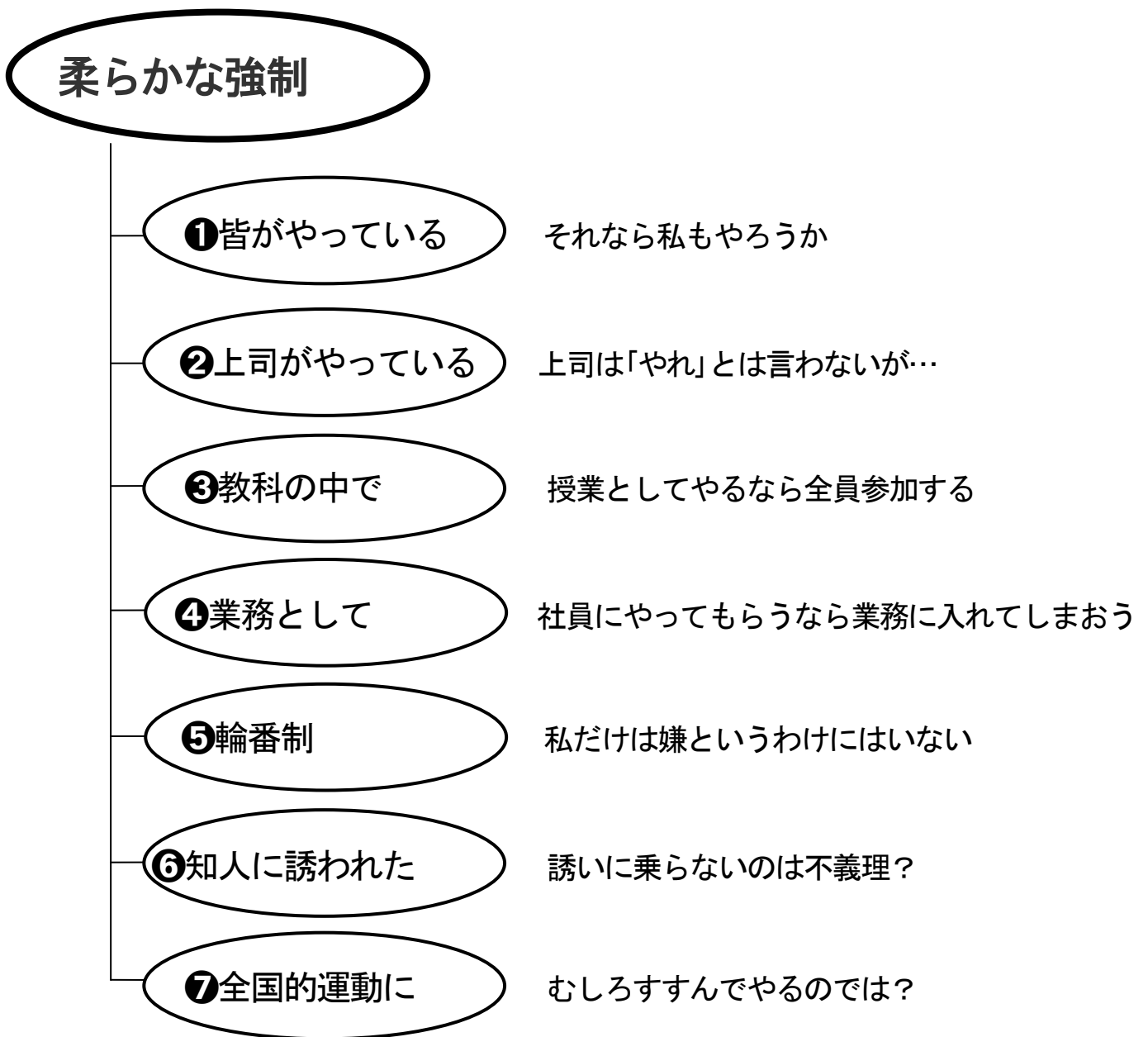


- ①活動や対象に魅力があれば、参加したいと思うものだ。
- ②誰にでもできるような活動にしてくれれば気軽にできる。
- ③活動したくなるようなアピールをすれば、活動者は寄って来る。
- ④受け手も活動に協力し、担い手と共同で活動をつくっていく姿勢。
- ⑤感謝の仕方が上手だと、担い手も幸せな気持ちになり、またやりたいと思う。
- ⑥受け手から何らかのお返しを受けると、次もやらねばなるまいと思うものだ。
- ⑦受け手の側が活動の成果をSNSやマスコミなどで公表してあげる。
- ⑧たとえば会社に一言言ってくれればやりやすくなる、ということ。

④「柔らかな強制」の工夫

日本人は1人で自発的に行動するよりは、なんとなく促されてやる方が性に合っているようで、古来、さまざまな形の「強制」が考えられてきました。「一見、強制に見えない強制」がポイントなのです。

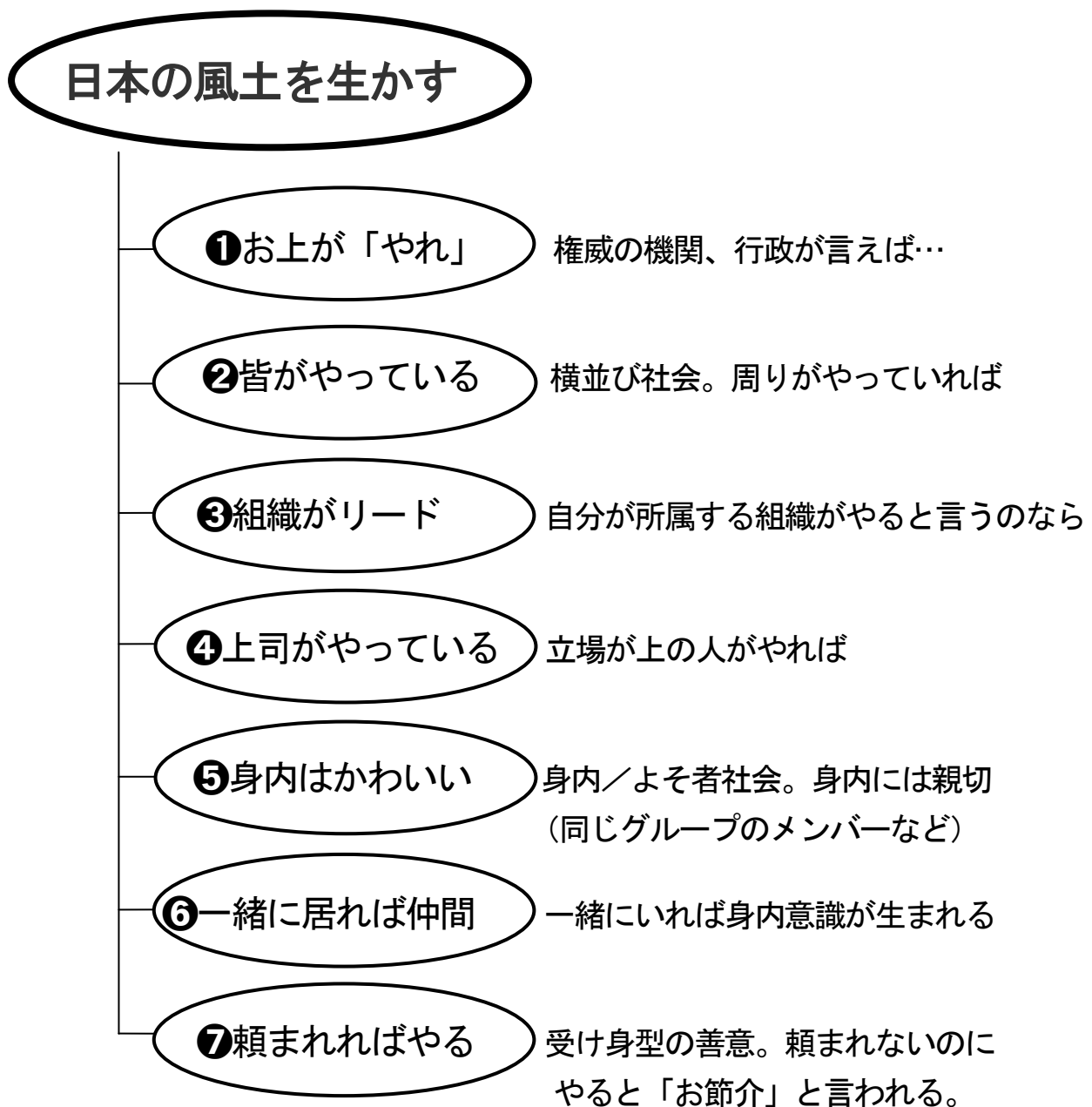
例えば「まわりの人が皆やっている」となれば、自分もやらざるを得ないと思うでしょうし、会社で上司が始めたら、部下としてやらないというわけにはいかないものです。町内会で輪番制で回ってくれば、これまた否応なくやることになります。日本の「横並び」という風土を利用したやり方です。



<第4章>

日本の風土を生かした仕掛け方

時代は激しく流れているとはいえ、それでも日本特有の風土は意外に残っているものです。「柔らかな強制」を含め、これまで紹介した仕掛け方の各所にこれらの風土を生かすあり方が含まれています。



<第5章>

担い手にも、受け手にも、 しっかり「寄り添う」方法

推進者は、担い手と受け手、双方の意向や願いを最大限に尊重しながら、助け合いや活動の仕掛けをしていく必要があります。彼らをセンターに引き寄せるのではなく、徹底的に彼らの元に近づき、そこで仕掛けをするのが、最も大事な要件と言えます。

①当事者（受け手）に対して

- ①本人は誰に助けてもらいたいのかを確認する。
- ②本人は何をしてほしいのかも。
- ③本人をこちらに来させるのではなく、本人のいる所に活動を持っていく。

②担い手に対して

- ④担い手のいる所に活動を持っていく。生活や仕事の場からテーマを発掘し、そこで仕掛ける。
- ⑤担い手がやりたいことを活動にする。その人の特性・特技を生かした活動を提示。
- ⑥一番いいのは、本人が既にやっていることを生かすことだ。
- ⑦「あの人がやってあげたい」という相手と結ぶ。
- ⑧その人の活動者としての適性も考える。どんな資質を持っているか。また、当事者から見て「あの人がお願いしたい」という人を選ぶ。
- ⑨本人の一番強い力を引き出し、活用する。本業で生かしている力とか。

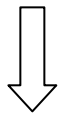
③当事者（受け手）と担い手の結び方

- ⑩両者の接点で活動が始まるようにセットする。
- ⑪両者の相性も大切にする。相性が合わないとうまくいかない。
- ⑫担い手と受け手が同じご近所に住んでいれば、これを生かす。
- ⑬できる限り双方向の関係にする。担い手がサービスをするだけでなく、何らかの「お返し」が可能なように。

⑭住民の活動は1対1のペアの関係で行われる。

- ①当事者の求める相手を活動者にする
- ②当事者の求めることを活動にする
- ③当事者の近くに活動を持っていく

受け手

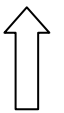


- ⑩両者の接点に仕掛け
- ⑪両者の相性も大事に
- ⑫ご近所で対面
- ⑬双方向の関係に
- ⑭1対1のペアで

推進者

- ⑮こちらの指示に従わせない
- ⑯相手を動かさない
- ⑰相手をまとめない
- ⑱相手を十把ひとからげに扱わない

担い手



- ④担い手の近くに活動を持っていく
- ⑤担い手のやりたいことを活動に組立てる
- ⑥担い手が既にやっていることを生かす
- ⑦担い手がやってあげたい相手とつなぐ
- ⑧担い手の適性や資質を大事に
- ⑨本人の最も強力な力を生かす

住民流福祉総合研究所
木原孝久

〒350-0451
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1 4 7 6 - 1
TEL049-294-8284
kiharas@msh.biglobe.ne.jp
<http://juminryu.web.fc2.com/>
